

指導資料



鹿児島県総合教育センター

生活 第16号

—小学校，特別支援学校対象—

平成27年4月発行

動植物の生命や成長への気付きの質を高める生活科指導の工夫

近年，児童を取り巻く自然環境や社会環境の変化により，自然に直接触れる体験が極めて少なくなってきたことや，生命の尊さを実感できていない児童がいるという状況が生まれてきている。そのような状況から，学習指導要領では，改善の具体的事項の一つに，「自然に直接触れる体験や動物と植物の双方を自分たちで継続的に育てることを重視するなど，自然の素晴らしさや生命の尊さを実感する指導に配慮する」ことが挙げられている。

そこで，本稿では，内容(7)「動植物の飼育・栽培」（以下「動植物の飼育・栽培」という。）の指導を通して，動植物の生命や成長への気付きの質を高める指導の工夫について，具体的な実践例を基に述べる。

1 「動植物の生命や成長への気付きの質を高める」ための指導のポイント

「動植物の飼育・栽培」の学習内容は，「動物を飼ったり植物を育てたりして，それらの育つ場所，変化や成長の様子に関心をもち，また，それらは生命をもっていることや成長していることに気付き，生き物への親しみをもち，大切にすることができるようにする。」ことである。その中で，「動植物の生命や成長への気付きの質を高

める」ための指導のポイントとして，次の2点を大切にしたい。

(1) 継続的な飼育・栽培活動の実施

「動植物の飼育・栽培」においては，児童が，動物を飼ったり，植物を育てたりする活動を継続することで気付きの質を高めることができる。例えば，アサガオの栽培活動では，芽が出た時，本葉が出た時，つるが伸びてきた時などのそれぞれの成長過程における気付きを自覚させていくことができる。また，それぞれの気付きと季節等を比較したり，関連付けたりすることにより「アサガオは，暖かくなると大きく育つよ。」，「アサガオは，寒くなると枯れてしまうよ。」といった植物の生命や成長への気付きの質を高めることにつながる。

しかし，学校によっては，飼育・栽培活動が，短時間の触れ合い活動で終わっていたり，児童が自分自身で行っていかず，飼育・栽培活動を継続的に行うことができるよう工夫していく必要がある。

(2) 飼育・栽培活動と関連を図った表現活動の設定

「動植物の飼育・栽培」においては，

飼育・栽培活動と関連を図った表現活動を設定することで、気付きの質を高めることができる。例えば、ミニトマトの栽培活動を継続してきた児童に活動を振り返り、表現する活動を設定することにより、「ミニトマトの実がいっぱいできたよ。」から「ミニトマトを上手に育てられるようになってうれしいな。」といった自分の成長への気付きへ高めることができる。飼育・栽培活動で生まれた気付きを無自覚・一過性のもので終わらせないためにも、飼育・栽培活動と関連を図った表現活動を設定していく必要がある。

2 「動植物の生命や成長への気付きの質を高める」ための指導の工夫

ここでは、単元「わくわく どうぶつランド」（第1学年）の実践例を基に、「動植物の生命や成長への気付きの質を高める」ための指導の工夫について紹介する。

(1) 児童の思いや願いに寄り添う導入

実践例では、学校探検の活動を通して高まった「『どうぶつランド』の動物たちと遊びたい。」という児童の思いや願いを取り上げ、動物と触れ合う活動を導入に設定している。動物と触れ合う時間を十分に確保することで、「動物のお世話を上手にできるようになりたい。」といった児童にとって必要感のある課題設定につなげている。そうすることで、お世話を通して、生命や成長への気付きの質を高めていくことにつながる。

(2) 生命を実感する活動の設定

実践例では、ウサギを抱いて温かさを

感じたり、獣医師と一緒に聴診器でウサギの心音を聞



いたりする活

写真 ウサギの心音を聞く児童

動を設定している。そうすることで、「ウサギを抱くと温かかったよ。胸のドキドキを手に感じたよ。」、「（聴診器で聞くと）私たちと同じように音がしていたけど、速かったよ。」といった動物も私たちと同じように生命をもっていることに気付かせることができる。

(3) 動物と継続的に関わる活動の設定

実践例では、動物と継続的に関わる活動を指導計画に設定してある（p.3「指導計画」右の「飼育活動」Aの場面）。その意義は、先に述べたとおりであるが、ここで大事なことは、単なる同じ活動の継続にならないようにすることである。そのためには、実践例のように、「願いをもつ活動」の過程では、児童の思いや願いをもたせるための触れ合う活動、「願いを実現する活動」の過程では、獣医師に相談して得た解決方法でお世話する活動、といったように活動内容の質を高めながら継続的に動物と関わらせていくことが大切になる。そうすることで、例えば、「ウサギが大きくなってえさをたくさん食べるようになったよ。」といった動物の成長や変化へ気付かせることにつながる。

(4) 「振り返りシート」の活用

実践例では、動物の飼育活動を通してできるようになったことや諸感覚を働か

せて感じたことを振り返り、表現できる「振り返りシート」を活用している（p.3「指導計画」右の「表現活動」Bの場面）。飼育活動と関連を図った表現活動の意義は、先に述べたとおりであるが、この「振り返りシート」は、児童が何を書けばよいか分かるよ

- (1) 単元名（実施学年） 「わくわく どうぶつランド」（第1学年）
 (2) 指導計画（総時数16時間）

過程	主な学習活動	時間	飼育活動	表現活動
願いをもつ活動	1 動物ランドの動物と触れ合い、今後の活動計画を立てる。	2	A	B
願いを実現する活動	2 世話の仕方を話し合い、動物の世話をする。 ○ グループごとに世話をする。	2		
	活動を振り返り、新たな願いをもつ活動	○ 動物ランドを支えている人（飼育委員会や獣医師地域の方々）に相談して、世話の仕方を確かめる。	1 (本時)	C
○ 世話を継続して行う。		6		
3 動物ランドのことや自分の世話について振り返り、「わくわくどうぶつはっぴょうかい」の計画を立てる。		2		
	4 発表の準備や練習をする。	2		
	5 「わくわくどうぶつはっぴょうかい」を行い、自分の世話の仕方や動物の様子を紹介し合う。	1		

- (3) 本時の目標 (この部分は、筆者が加筆)
 動物ランドを支えている人を知ったり、相談したりする活動を通して、動物に合った世話の仕方が分かるとともに、これからの飼育活動に意欲をもつことができるようにする。

- (4) 本時の展開（5 / 16時間）

過程	時間	主な学習活動	教師の手立てと評価（※）
願いをもつ活動	5	1 学習カードを基に、飼育活動の課題を話し合う。  うまくウサギを抱くことができないんだけど・・・	・ 前時までの願いを想起できるように、学習カードを提示する。
願いを実現する活動	30	2 本時の活動について話し合う。  じゅういさんに、どうぶつのせわのしかたをきこう。	・ 「獣医さんに教えてもらえる。」という期待感が高まるように、獣医さんの紹介を行う。
		3 動物への接し方や世話の仕方を獣医さんに相談する。  ウサギは、どうやって抱っこするんですか。  首の所をつかんで、お尻に手を添えるといいよ。	・ 「接し方」、「えさ」、「掃除」といった共通の課題と「困ったこと」、「聞きたいこと」といった児童の一人一人の課題を明確にできるように観点を提示するとともに、形式を工夫した学習カードを活用する。
		4 動物の心音を聞く。  ウサギさんのドキドキを聞いてみましょう。  僕たちと同じで、ドキドキしているんだね。	・ 児童の思いを生かし意欲的に活動を進めることができるように、グループを編成する。
		5 グループごとに活動する。  ウサギの首の所をつかむと、抱っこしやすいね。  手で触っても、ウサギのドキドキが分かるね。	・ 生き物も生命をもっていることや成長していることに気付くことができるように、動物の心音を聞く活動を設定する。
をもち活動	10	6 活動の振り返りをする。  獣医さんに抱っこの仕方を教えてもらって、上手にできるようになったよ。	※ 動物に合った世話の仕方があることに気付いている。（行動観察、問い掛け、対話、つぶやき） ・ 活動のよさを賞賛し、これからの飼育について意欲を高めることができるように励ます。 ・ 活動を振り返らせるために、本時のめあてを基に「見つけたよ」、「できたよ」などの観点を提示する。 ・ 獣医さん以外の動物ランドを支えている人々も紹介し、飼育活動への意欲を高めていく。 ・ 今後の飼育活動への意欲を高めることができるように、獣医さんからも励ましの言葉掛けをしてもらう。

【南さつま市立加世田小学校 濱村隆志教諭の実践から】

うに、「じょうず
にできたかな？

(えさ・そうじ・
だっこなど)」,

「かんじられたか
な？(さわって、
みて、きいて、に



おって)」を観点 振り返りシート例
として示し、児童が表現しやすくなるよ
う工夫している。そうすることにより、
例のような動物の生命や成長への気付き
を自覚させることができる。

(5) 「わくわくどうぶつはっぴょうかい」 の設定

実践例では、友達や家族、お世話になっ
た地域の人々を招いて、自分ができるよ
うになったことや教えたいことなどを発
表する場として「わくわくどうぶつはっ
ぴょうかい」を設定している (p.3
「指導計画」右の「表現活動」Cの場
面)。「振り返りシート」や写真等を活
用してこれまでの学習を振り返りながら
発表する内容を書かせることにより、例
えば、「えさを上手にあげられるようにな
ったよ。頑張ってお世話したから大き
くなったよ。」といった自分自身や動物
の生命・成長への気付きを自覚させるこ
とができる。また、発表会で伝え合い、
交流することにより、友達の気付きから
新たな気付きが生まれることになる。

3 飼育・栽培活動を行うための留意点

(1) 活動の日常化を図る工夫

日常的に動植物を世話したり、観察し

たりすることで、動植物の生命や成長に
気付く。そこで、学校生活の様々な場面
で飼育・栽培活動ができるようにするた
め、例えば、玄関、教室などの鉢置き
の場所や、「一日一回声掛け運動」など
の意欲を高める取組の工夫が必要である。

(2) 児童の健康・安全への配慮

飼育・栽培活動を始めるに当たっては、
動物アレルギーのある児童がいないかを
事前に保護者から確認をとっておく必要
がある。もし、動物アレルギーのある児
童が在籍している場合は、保護者と相談
の上、動物アレルギーの程度に合わせた
活動を行わせるなどの配慮が必要である。

また、鳥インフルエンザなどの感染症
対策として、活動の前後に手洗い・うが
いをする指導も大切である。

さらに、安全面から動物を囲むゲージ
や軍手の準備などの配慮も必要となる。

動植物の生命や成長への気付きは、道徳教
育の生命尊重や自然愛の内容と関連が深い。
例えば、生命尊重を扱った道徳の時間にお
ける「命を大切にしたい。」という思いは、生
活科で生き物の死に直面した時の「命は一つ
なんだな。」という気付きにより、一層深ま
ると考えられる。したがって、動植物の生命
や成長への気付きを高めるには、道徳の時間
や他教科等との関連を図った指導を考慮す
ることが大切である。

—参考文献—

- 文部科学省『小学校指導要領解説生活編』
平成20年、日本文教出版

(企画課)